

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520146

研究課題名（和文） 能楽資料の調査と整理—大蔵弥右衛門家所蔵伝書と新生田文庫本—

研究課題名（英文） Researching and Cataloguing Noh materials:A Collection Book that has been transmitted to Ohkura Yaemon family and a New collection that has been transmitted to Ikuta family newly owned to Kansai University

研究代表者

関屋 俊彦 （ SEKIYA TOSHIHIKO ）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：70125136

研究成果の概要：「能楽資料の調査と整理」という主目的については、ほぼ達成できた。東京はもとより佐渡島・長浜・山口・臼杵を訪れることができた。中でも佐渡島の山本修巳氏にお会いし、生田秀の多くの情報を得ることができた。『生田文庫新蔵書目録并解題』として100頁を越える冊子を近々冊子（非売品）にする予定である。これは改めて学術図書に応募したい。大蔵虎明著の間狂言本は、架蔵の大蔵虎光間狂言転写本と共に、これも学術図書に応募したい。両書ともほぼ翻刻は終えている。大蔵弥右衛門家の事情により中断しているが、再確認の依頼は取れている。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成18年度	600,000	0	600,000
平成19年度	700,000	210,000	910,000
平成20年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	420,000	2,420,000

研究分野：能楽

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：①新生田文庫②解題目録③大蔵弥右衛門家④間狂言⑤能楽写真界

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 新生田本は平成14年に関西大学図書館に生田秀昭氏によって寄贈されたものだが、せいぜい『図書館フォーラム』2004などに概要を記した程度であった。

(2) 大蔵弥右衛門宗家24世の御厚意により、同家に伝わる資料を拝見することができたのは1997年のことであった。その中のいくつかを発表したが、大蔵虎明の間狂言本があることを知り、写真撮影を許可された。弥右衛門氏がなくなり作業は中断した。

## 2. 研究の目的

(1) 新生田本の特質を明らかにすること。そのためには単なる目録作りではなく、書簡を含めた一点ずつの資料を点検し、解題目録とする。更にアサヒビール創設当時、ドイツに派遣された生田秀とその子息耕一の実績を明らかにすること。

(2) 大蔵虎明の間狂言本の翻刻できれば影印本と併せたものとしての刊行。架蔵の大蔵虎光間狂言転写本も紹介。

(3) 付随する能楽資料の発掘。

### 3. 研究の方法

- (1) 新生田本については、一点ずつの資料の書誌をとり、他機関の資料との比較を行い、資料の特質を明らかにする。また、秀・耕一の履歴を探るため、佐渡島等の現地調査を行う。
- (2) 虎明間狂言本と虎光間狂言本の翻刻。
- (3) 訪れた現地調査での付随する能楽資料の発掘。

### 4. 研究成果

- (1) 新生田本については、『生田文庫新蔵書目録并解題』として、近々非売品ながら出したい。関西大学生協に依頼し、従来通りの科研費研究成果報告書の形をとることになる。頁総数は100頁を越えている。その上で大方の御叱声を得て学術図書刊行に応募したい。

ここでは、要約したものを述べるにとどめる。

新蔵生田本の書籍284点、書簡233通、卷子装書簡8巻、葉書40通を中心として整理し、まとめたものである。目次で示せば「Ⅰ能楽関係写本の部・Ⅱ能楽関係版本の部・Ⅲ明治以降能楽関係刊本の部・Ⅳその他芸能の部・Ⅴ芸能以外諸書の部・Ⅵ書簡の部・解題・索引」となる。Ⅰ～Ⅲについては更に「謡本の部・注釈の部・伝書の部・付の部・史料の部・狂言の部」と分類した。

まず、関西大学図書館の生田文庫あるいは今回の新蔵生田文庫の根幹となった生田秀について述べる。履歴を知る基本資料としては刊年不明ながら「生田秀翁略伝」を入手困難な点を考慮して全文を紹介した。また、山本修之助『佐渡の百年』（昭和47年）・『吹田市史 第三巻』（平成1年）・『Asahi100』（平成2年）・山本修巳「日本近代ビールの父 真野町出身 生田秀」（『佐渡郷土文化』113号・平成19年）・同『佐渡ジャーナル』（平成21年）・『ビールが村にやって来た！』（平成20年）などが参考となる。

生田秀にかかわることでの最大の成果は、佐渡島を訪問し、山本修巳氏にお会いし、氏の御厚意により、生田家の墓参・菩提寺妙満寺での過去帳拝見、秀の通っていた真野小学校に保存されていた写真や山本家に伝わる関連資料を拝見することができたことである。

秀は明治5年15歳の時に山本藤九郎（四世）の娘リンと結婚するのだが、藤九郎が「謡曲うたいの藤九郎」といわれるほどの人で、秀の能楽への興味は佐渡島の独特の環境に相俟って影響されたことであろう。秀は明治初頭に創立間もない大阪麦酒会社（のちのアサヒビール）からドイツに派遣され、彼地で謡を披露し喝采を浴び、さらには大阪暮らして大西閑雪に観世流の謡に傾倒するのだが、そうした素養は早く佐渡島時代からあった訳である。

明治39年に大阪麦酒・札幌麦酒・日本麦酒の三会社が合併して大日本麦酒会社となった時、常務取締役役に内定していたが、会社発足後の二日後、病のため51歳でなくなっている。一男五女があり、長男が耕一で、三女の婿は大日本ビール会社の社長をつとめ、戦後通産大臣にまでなった高橋龍太郎である。経済人として華々しい活躍をした秀が、一方で謡を嗜み資料収集に励む文化人でもあったことを本書では証明できると思うものである。

次に新蔵書から判明することは、まず秀については、

一、謡本53点中、ある程度まとまった揃本としては観世流が主となっている。基本的な現行曲を求めたのは当然として、『（福王流一番綴番外謡本）』などのように、なるべく未刊謡曲を求めようとしている。

一、付の類が多い。すなわち手付・節付・型付の類が100点を越えて最も多い。大西閑雪に謡を、また大倉流小鼓も習っており、その力量は地元で有名であった。秀自身が実際に舞台上で使用する目的で購入していた訳である。購入先は大西家同門でもあった鹿田松雲堂の鹿田清七からが多かった。

一、圧倒的に近世の能楽関係のものが多いが、写本については、すべて新出資料といつてよい。目につくものを数点あげる。

『（綴葉装五番綴謡本）』（仮称）20冊は紺表紙・朱地金泥草花模様等書題箋であるが、表紙に押八双がかすかに見られ、いちおう上掛り謡本としたが、上掛り・下掛りの両方の特徴を有するものがあり、それぞれの本文が固定する以前の過渡的な内容を持っているものである。

『（三十五冊十番綴番外謡本）』（仮称）は全350曲の大部な謡本。

『（福王流一番綴番外謡本）』（仮称）87冊・あるいは『（番外謡本）』（仮称）57冊は三百番・四百番などの番外謡本の分類に属するものであろう。

『春宮風鼓』は「宮増弥左衛門尉親次伝書」のこと。親次伝書には大永元年に暮松与三郎に相伝した奥書などが見られる。

『（関寺小町伝授状）』卷子装は葛野九郎兵衛政賀から藤宮七兵衛への享保七年の《関寺小町》伝授状。七兵衛は同家五代目の忠明。

明治以降の活字本でも高木半の新作謡本がまとめて入っている。高木半は秀が渡独する時、送別の歌を送っている書簡も残されていて、親密な仲であったことがわかる。

狂言の写本では『（九冊本狂言台本）』（仮称）は「脇狂言并初事・大名事・すつば事・百姓并聳事・山伏 座頭 女もの・出家事 舞事・端物・語事・狂言袴燕尾并鬼事」という他に例を見ない分類法をとっている。

なお、六麓会で「新生田本『石橋早鼓之一件』

と『わらんべ草』「生田秀、佐渡からの出立」で報告したのもその一環である。

一、茶道に嗜みがあった。自宅には茶室兼能舞台があり、謡等も指導者を呼んで習っていたものであろう。『茶則』があることから茶道は速水流を習っていたと推測できる。

一、新蔵書の中で際立って古いのは『和漢朗詠集』（卷子本）である。古筆了仲の極書もあり、為家・行能・通村・実陰の名が見え、書き継ぎがあるとはいうものの鎌倉時代成立にまで遡らせてよいようだ。次いで『明末扇面書画帖』も扇面折状の珍しい装丁で書8面・山水画5面が描かれる確かに明末成立とってよいものである。

さて、生田秀の子息耕一は万葉集研究と小鼓研究の別々の面で知られていたうらみなきにしもあらずであった。耕一の能楽への興味は父秀からのものであった。大西閑雪に習い父子共々同門である。

耕一の関心は、おおよそ三期にわけられる。まず、山崎楽堂との共著である『鼓筒之鑑定』（大正6年）に至るまでの箏曲を含めた芸能への関心である。箏曲は『箏曲明石の曲』『生田式箏曲音符解説』を大正4年に出している。第二期は自費出版をした『寄生木』刊行の大正13年を中心とした歌人としての期間である。「万葉三水会」なる同人結社にも参加し、それがそのまま第三期の『万葉集』や上代文学への研究へとつながっていった。澤瀉久孝の薫陶を受け『万葉釈文索引 記伝の部』（昭和4年）・『古葉畧累聚索引』（昭和5年）・『古事記のミホトの研究』（昭和6年）・『万葉釈文索引 碩鼠漫筆之部』（昭和6年）・『座摩神の新研究』（昭和7年）・『東雅索引』（昭和7年）・『万葉集難語難訓攷』（昭和8年）を著している。これは昭和60年になって『万葉集研究基本文献叢書』（教育出版センター）として復刻されている。

中でも『万葉釈文索引 記伝の部』は文献書院から出版されたものだが、学習院長の荒木寅三郎が題辞を、佐々木信綱・新村出・吉沢義則・澤瀉久孝という当時の錚々たるメンバーが序文を寄せている。寄贈先も多く内藤湖南からの礼状も大事に保存されていた。

書簡は、図書館によっては雑として取り扱われることも多いが、文化的価値の高いものも多い。関大図書館では書簡類・卷子装書簡類・葉書類に分別して保存された。書簡類は五十音順に整理し、差出人・差出人住所・消印・内容紹介・封書か原稿用紙かなどの種類・特記事項を記した。たとえば学習院長の荒木寅三郎とは長いつきあいであったことがわかる。大事な書簡は卷子仕立てで保存している。荒木寅三郎・石井庄司・内藤湖南・中尾都山・宮武竹隠・山本悌二郎・吉沢義則からのものである。葉書は未使用のは含めず、45通について学術的価値の高いものについて

内容を吟味した。絵葉書で見るべきものは特記した。

(2)大蔵弥右衛門家伝書特に虎明間狂言本については、24世宗家弥右衛門氏の逝去のため中断しているが、25世宗家の弥太郎氏から便宜をはかっていただけるようになってい

る。すなわち岩波文庫・大蔵虎明著『わらんべ草』において笹野堅氏が解説で[その後萬治三年十二月虎明は、大蔵長吉に間の本三冊を書いて与えた。長い吉は虎明の五男である。(中略)この本は「間頭之類 謳」「間 応言 答 萬」の二冊だけが現存している]と記されているものである。法政大学能楽研究所に写真が残されていたが、橋本朝生氏から「まだ大蔵家に残されているのではないか」との助言により調査に伺ったところ、まさに現物があつた。カラー写真で撮影し、翻刻も済ませたのだが、細かい部分は、もう一度現物と照合しなければわからない。お願いしようとしていた矢先に弥右衛門氏は、なくなられてしまった。あとを継がれた弥太郎氏からも快諾を得ているのだが、お家の事情もあり、いまだ実現せずにいるのはやむを得ないかと考えている。

また、架蔵のものとして大蔵虎光間狂言転写本がある。橋本朝生氏が本狂言については古典文庫で翻刻されているが、間狂言については不明とされている。転写本という不満は残るが、学術的価値は高いので、前書とあわせて、これも期を見て刊行したい。

(3)「近代大阪の演能場」と題して『国文学』（関西大学国文学会）91号に論文を載せた。吉田永宏教授の古希記念号で、氏が近代文学専門であったため、また、関西大学の位置する大阪の能楽の実態を調べたものである。大阪女子大（今の大阪府立大）に所蔵されている『能楽写真界』は従来さほど知られていない貴重な雑誌であった。関西大創設者の児島惟謙が能楽の会を主催していたこと、生田秀のことも記されていることなど思わぬ余得があつた。

(4)「関大本鷺畔翁狂言《寝代り》復曲」と題して『国文学』（関西大学国文学会）92号に論文を載せた。歌舞伎に手を出すなどして能楽の世界から追放された鷺仁右衛門宗家の最後の狂言師・鷺畔翁の台本が関西大に伝わっていたのが気になって調べてみたものである。幻の日本カワソウの説話にも触れ、大正年間のことなのに鷺流の扇一本見つかっていない事実には愕然としている。大蔵流狂言方安東伸元氏に御協力をいただき千里中央のA&Hホールで復曲を試みてみた。

(5)「うたって笑って～狂言研究入門～記録」（『笑いの科学』第1号、松籟社）は、日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス」に応募し採択されたもので、その時の記

録である。中高生向けに専門をいかにわかりやすく、しかもレベルを落とさずに書くかという点に腐心し貴重な体験となった。すなわち、狂言研究の現状あるいは期せずして私の狂言観が現れているものである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

- ① 関屋俊彦、「うたって笑って～狂言研究入門～」記録、『笑いの科学』、第1号、松籟社、p 65～p 70、2008年、査読無
- ② 関屋俊彦、「関大本驚畔翁狂言《寝代り》復曲」、『国文学』、第92号、関西大学国文学会、p 117～p 129、2008年、査読無
- ③ 関屋俊彦、「近代大阪の演能場」、『国文学』、第91号、関西大学国文学会、P 375～P 394、2007年、査読無

[学会発表] (計 2件)

- ① 関屋俊彦、「新生田本『石橋早鼓之一件』と『わらんべ草』」、六麓会、神戸女子大、2008年
- ② 関屋俊彦、「生田秀、佐渡からの出立」、六麓会、兵庫県私学会館、2008年

[図書] (計 2件)

- ① 関屋俊彦、『生田文庫所蔵書目録并解題』、2009年6月予定、非売品
- ② 関屋俊彦、『大蔵虎明間狂言本』 予定

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

関屋俊彦 (SEKIYA TOSHIHIKO)  
関西大学・文学部・教授  
研究者番号：70125136

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし